HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	開放制教職課程出身教師の抱えさせられている「困難」とその要因 : 北海道における初任期の高校教師のサバイバル・ストラテジーの多様性の検討を中心に [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	山口, 晴敬
Citation	北海道大学. 博士(教育学) 乙第7200号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92355
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	YAMAGUCHI_Seikei_abstract.pdf (論文内容の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）　　氏名：山口晴敬

学位論文題名

開放制教職課程出身教師の抱えさせられている「困難」とその要因
~北海道における初任期の高校教師のサバイバル・ストラテジーの多様性の検討を中心に~

１．本研究の問題意識と目的

本論文は、北海道の高校教師が初任期に突き当たる仕事上の「困難」とそれへの対処(戦略)の事例検討を中心に、一般大学・一般学部の「開放制」教職課程出身教師の抱えさせられている「困難」とその要因を明らかにすることを目的としている。

この考察のためには、幾つかの注釈が必要であり、先行研究の検討を必要とする。

第一に、教師の仕事をどのように定義するかである。「教員」としての教職なのか、「教師」としての「教職」なのか。「教員」という呼称は、「組織人」を含意している。「組織人」としての職能形成は、現在の在り様を体現した非専門職としてのものであり、人事配置や職場環境に依存的である。一方、「教師」という呼称は、「専門職」を含意し、その職能形成は、専門職にふさわしいものでなければならない。“専門職としての教師”となるには、専門家として育ち連帯しあう同僚性（collegiality）の構築が必要である。

第二に、「高等学校」というフォーカスが、教師研究において固有の意味をもつという点での注釈である。高等学校教師には、教科指導の充実が期待されている。しかし、高等学校は、個々の学校によってそれらの指導や方法、規定する諸環境や実態は一様ではないため、初任期の教師にとって「この学校に適した、自分のやり方」を確立していく過程では、多くの課題と困難に直面することは避けられない。そして、それら過程は「組織人」としての「教員」の職能形成であり、“専門職としての教師”のそれではない。

第三に、地域と教師という地域性を重視することの本質的な重要性である。北海道は、人口が減少する中での地方からの札幌圏への人口流出と、それにともなう地方の過疎化が著しく進行している。教育現場においても、統廃合あるいは存続の危機にある小規模の高等学校は郡部に多数存在する。これら小規模高等学校の存在は、人口減少社会に突入した我が国においての将来の姿を描いている。よって、北海道における高等学校教師が抱えさせられている「困難」を明らかにすることが、我が国にとって近い将来必要となる教師研究の知見の蓄積に寄与することとなるのである。

第四に、教師の「初任期」に着目することの本質的な重要性である。「初任期」は、これからの教職人生において重要な位置を占めると同時に、教師の職能形成や職能成長においてきわめて重要な意味を持つものである。よってそれらの検討は、教師の職能形成を探索す

る上できわめて重要なのである。

第五に、教師研究において、事例研究が本質的に重要であることである。各々の教師が直面する課題が何によって生じているのかを具体的に検討することで、それら課題が生じている要因が構造的なものなのか、そしてそれは普遍的な問題になりうるのかが見えてくる。

これらを踏まえて、開放制教職課程出身の初任期の教師が、“専門職としての教師”として、当該学校において「どのように“教師”として生き残り続けていこうとしているのか」、その学校の先輩教師や管理職は彼らとどう関わっているのか。組織としての“学校”は、彼らをどのように、“教師”に（「教員」に）にさせようとしているのか。さらには、初任期の教師が、これから教師という職をどのように全うしようとしているのかを、具体的な事例を検討することで、彼らのその戦略を描きだしていくことを中心に検討し、開放制教職課程出身教師の抱えさせられている「困難」とその要因を明らかにする。

2．本研究の構成ならびに各章の要約

第１章では、X 県における高校教師志望学生へのインタビュー調査を踏まえ、開放制教職課程出身者の教師文化の理念的側面がどのように培われていくのかを明らかにすることを目的とし、「教師ビリーフ」に着目した検討を行った。その養成において、教師ビリーフは「教育実習」において凝縮した形で発露すること、形成された教師ビリーフは、初任期の教師を疲弊させることにもなるということが明らかとなった。

第２章では、X 県における開放制教職課程出身である高等学校新任教師への継続的インタビュー調査を踏まえ、新任教師が、日々何によって悩み、何によって支えられているかを個別具体的に明らかにすることを目的とし、組織・同僚などの社会関係性に着目した検討を行い、抱えさせられている「困難」が生じる要因を考察した。新任教師にとって、先輩教師との関係構築に関わる諸課題は、彼らに多くの「困難」を抱えさせる要因となっており、それは、学校組織文化への包摂という組織社会化がもたらしたものであった。一方で、新任教師を気遣い、良き気づきを与えてくれている先輩教師や管理職が、新任教師の教職遂行を支えていた。新任教師に必要なのは、職能形成に寄与する先輩教師や管理職との「縦関係」の同僚性の構築であり、それらの存在の気づきをもたらす「省察」であった。

第３章では、北海道における量的調査より、北海道の高等学校教師が初任期において抱えさせられている「困難」とその要因を検討した。学校規模に関わる「教員」数と「教員」構成の問題が、抱えさせられている困難の量と質に影響していることが明らかとなった。教科構成人数が 1 人の初任期の教師は、2 人以上と比較し、圧倒的に困難の量と質が違っており、生徒指導や教科指導、HR 経営以上に、先輩教師との「縦関係」の同僚性の構築がかなわず、職場内における「職能形成機能」ができない状況にあることも明らかになった。

第４章では、北海道における高等学校の初任期教師へのインタビュー調査を踏まえ、初任期において抱えさせられている困難とそれへの対処(戦略)をより詳細に明らかにした。検討に当たっては「質的データ分析法」を用いて分析を試み、勤務校ごとに具体的に検証した。

北海道の初任期の教師は、教師（「教員」）として生き残り続けるために、主体的で多様な「サバイバル・ストラテジー」を描いていた。彼らが抱えさせられている「困難」は、“専門職としての教師“として職能形成を図りたくても図ることができないことから生じており、それは、当該学校において「即戦力」を期待されているからこそであった。また、初任期の教師が、“専門職としての教師”としての職能形成をあきらめ、もしくは、出来うる範囲内での限定的な職能形成に満足することで、「教員」として生きぬく戦略をとる姿もあった。

第５章では、北海道における経験者教師への量的調査を踏まえ、初任期の教師は先輩教師にとってどのような存在なのかを明らかにすることを目的とし、先輩教師の初任期の教師へのまなざしに着目した検討をおこなった。先輩教師は、新参者である初任期の教師を即戦力として期待しており、即戦力とならない初任期の教師への反発意識はとても強く、ゆえに彼らとの関係性はより悪化し、したがって職能形成に関わる「縦関係」の同僚性も機能していなかった。

各章を踏まえ、“専門職としての教師”としての職能形成や職能成長を求めている初任期の教師にとって、当該学校組織に勤務している限りそうならない現実が、教師の初任期において構造的に「困難」を抱えさせていたことが明らかとなった。しかし、本稿では、職能形成に関わる個別具体的な方策については検討することができていない。よって、それらの検討を今後の課題として、引き続き研究を継続していく。